

Nara Women's University

19世紀フランス小説に見る母と息子たち： 「男らしさ」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部外国文学研究会 公開日: 2012-04-13 キーワード (Ja): 19世紀フランス小説, 息子, 男らしさ, 母 キーワード (En): 作成者: 高岡, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2946

19世紀フランス小説に見る母と息子たち

— 「男らしさ」をめぐる —

高岡尚子

これまで、『外国文学研究』第28号に投稿した論考を皮切りに、19世紀前半のフランスにおける「男性性」および「男性像」のあり方を、小説作品に描かれた人物たちを題材として読み解く作業を続けてきた。近代国家の成立期にあたり、大きな社会的変革に心身をさらすことになった青年たちが、新しい社会が要求する「理想の男性像」をいかにして感知し、期待に沿うよう努めたか、あるいはそうしなかったかを分析する中で、当時の「男らしさ」規範と同時に、そこから脱落する青年たちのさまざまなあり方が浮き彫りになった。¹⁾

しかし、これまでの検討対象は、青年たちに個別の経験に留まっており、彼らに強い影響力を及ぼす親族関係（そこには社会階層の問題も含まれる）については、重要視しながらも考察の主たる対象にすることはなかった。したがって本稿では、青年たちが父・母からどのような影響を受けることになったのか。また、そうした影響を被った結果が彼らの「男性性」にどのように作用したかを検討してみたい。「父親」との関係については、前稿においてかなりの紙幅を割いてきたことでもあり、今回は特に彼らと「母親」との関係の主たる関心の対象とする。今回も小説作品を題材にするが、これまで主に扱ってきたジョルジュ・サンドに加え、スタンダールやバルザックなど男性作家の作品にも注目してみたい。

1. 男の子たちの育てられ方：父の役割・母の役割

フロイト以来、子どもたちの成長の過程には、両親との関係が心身両面において多大な影響を与えると考えられるようになり、それはもはや常識のようになって現在に至っている。本稿で問題にしている19世紀前半のフランス社会はフロイト以前の時代であって、こうした考えが前提として存在するわけではない。だが、小説作品に見出される親子関係は実に多様かつ複雑であり、そこに生じる心理的葛藤が、ドラマの根幹を成していることも少なくはない。まずは論考の手がかりとして、当時の男の子たちにとって、一般的に、父親および母親がどのような存在であったかを明らかにしておこう。

息子にとっての父親

「男／女」という性の二分法を前提にしたジェンダーのあり方を想定すれば、男の子にとっての父親は、日常にごく近くにいる同性という意味でも、社会的にその立場を継ぐべき者という意味でも、ロール・モデルの役割を果たすと言ってよいだろう。しかし、これはあくまでも単純化された図式であって、小説作品をひもとけば、父と息子との関係がいくつかの点において両義的であることがたやすく見て取れる。サンドの小説『アンドレ』で、侯爵が息子をののしる場面はその好例であろう。

「泣いて、やせて、死んでしまえ。お前みたいなばか者には生きている資格もないわ。絶対に、私の承諾が得られると思うな。そうしたければ、私が死ぬのを待てばいいさ、だがそうはさせてやるものか、お前に思い通りあんな女と結婚させてやるなんて……。」²⁾

これは、自分の思惑にそぐわない嫁候補を連れてきた息子に対する、父の発言である。強い憤りを表す荒々しい言葉には、息子に対する激しい失望感

と同時に、侯爵という立場や権力を、自分と同じように享受し拡大して欲しいという期待の深さが感じられる。つまり、父は一方で、息子に自らの持つすべてを譲りたいという願いがありながら、同時に、自分に逆らうことを許さない、同性のライヴァルのような側面を持つと言えるだろう。

さらに、19世紀初頭のフランスが直面していた政治・経済事情を考慮に入れれば、事は一層複雑だと言わざるを得ない。この時代のフランスは、革命後の動乱とナポレオン時代の戦乱を経て、ブルジョワの資本と倫理とが支配する近代社会へと変貌しつつあった。革命によって王や貴族たちが社会の頂点から追われ、ナポレオンのような、腕力と機知で血なまぐさい世を渡ることでできる男たちが、一旦は覇権を握った。しかしこれも長続きはせず、皇帝の失脚と共に、彼らの価値観はブルジョワたちのそれへと変革を迫られたのである。先の論考において強調したように、この「理想の男性像」の劇的な変化は、ひとつの潮流がたちまちのうちに時代遅れとなることの証左であり、言い換えれば、息子にとっての父は、常に失効したモデルとしてしか機能しない可能性を持つという意味である。

結果として、息子にとっての父親は、次のふたつの役割のうちのどちらかを果たすことになるだろう。ひとつ目は、息子の可能性を圧殺してしまうほどの強権的な存在である。この種の父は、息子の母を同時に抑圧する傾向が強い。ふたつ目は、前時代の遺物となり、自らの弱体化をなし崩し的に受け入れてしまう存在である。彼らは時代に逆らおうとしないが、そのことによって母親の力を増強させ、息子と母との関係を非常に緊密なまま保持させることに、意図せず加担してしまう。

息子にとっての母親

この時代のジェンダー規範と性別による住み分けの徹底具合を考慮に入れれば、息子にとっての母親は、社会的な意味合いでのロール・モデルにはな

り得ない。ではどのような立場と役割を担うことになるのか、ということについては、彼らの姉妹との比較が非常に有効である。それにより、女の子にとっての母親と、男の子にとっての母親の立場がいかに異なっていたかが明確になるからである。例として、バルザックの『幻滅』に登場する兄妹に注目してみよう。

地方都市アングレームに住む主人公一家は、息子のリュシアンを中心に、母と妹の三人家族である。19歳にして天才詩人と持ち上げられるリュシアンではあるが、彼には自活できるような手段や、名を上げるための力が持たされていない。早くに夫を失い未亡人となった母は、何とか息子を一人前にしようと懸命に働いている。また、妹のエーヴは、兄とホモソーシャル的連帯でつながった親友ダヴィッドと結婚し、夫婦そろってリュシアンに尽くすことになる。パリでの成功を夢見るリュシアンは、自分の道を突き進んでいるかに見えるが、それを支えているのはひとえに、母と妹夫婦が彼に託す希望と献身なのである。

ここに、母の息子に対する役割の典型を見出すことができるだろう。夫を失った妻は、夫婦という束縛から解放されたという意味合いにおいては、ある種の自由を味わうことは可能であろうが、生活を支えるために過酷な現実を生きなければならない。その過酷さを脱するための方法は、夫亡き後、できるだけ速やかに息子に栄光がもたらされることである。Pascale Hustacheが言うように、「このような女性は従って、息子の幸福しか求めない」³⁾のである。Hustacheはまた、娘に対する母親の態度については「母親は何よりも娘の純潔を守るために監視している。なぜならそれは良縁のための交換財なのであるから」⁴⁾と述べる。これをリュシアンに当てはめれば、「奉仕を求める息子」に対し、「犠牲をいとわない母」と「交換財となる妹」⁵⁾という図式になるだろうか。一家にあって、全ての期待を背負う息子と、それを支える女たちという力関係が、ここに集約されていると言えるだろう。

2. 母を取り込む・母に取り込まれる：息子と母の癒着構造

父・母の機能を図式化すると、同性としてモデルあるいはライヴァルとして存在する父と、息子に奉仕し自己犠牲を払う母という形が現れるが、小説作品の中にはこうしたモデルケースから逸脱する例が散見され、読者の関心を引くことになる。サンドの作品の場合、すでに言及した『アンドレ』などを代表として、父親からの機能の受け渡しがうまくいかず、男性性の獲得や発揮に大きな難を示すケースが多く観察される。この現象について、別稿においては父親との関係から検討したが、母親との関係から問い直す時、そこには新たに母親との「癒着 *adhérence*」構造とでもいうべきものを指摘することができるだろう。

Elisabeth Badinter は *XY-De l'identité masculine* (邦訳題『XY-男とは何か』)において、女性(母)から産まれる子どもたちは元来母親と同化(癒着)しているものであり、異性である息子はそこから身を引き離し、男としてのアイデンティティを確立しなければならないため、娘の場合に比べてより大きな困難を経験すると指摘している。

母親と、女性であるということと、何かしてもらっただけの受け身の赤ん坊という状況に抵抗しなければ、男として存在することができない。自分が男であると示すために、男の子たちは三度にわたり、自らを、そして他人を納得させねばならない。それは、女ではない、赤ん坊ではない、ホモセクシュアルではない、という三つの否定である。⁶⁾

この文脈からは、男の子たちはその性を受けたことによって直ちに男になるのではなく、母親の女性性を否定するという段階を経て、全く異種のものである「男性性」を獲得するという手順が読み取れる。当然のことながら、ここで「男性性」のモデルを示すのが父親の仕事であり、もともとあった

「癒着」の構造を妨げ、息子を自立の方向へと促すことになるのである。

母を取り込む息子

しかし、この「癒着」からの脱出が常にうまく果たされるとは限らない。『アンドレ』の主人公アンドレは、幼い頃に母親を失っているにもかかわらず、あるいはそれゆえに、彼女から受け継いだ形質から脱却することができない。彼の母親についての言及は作品中にわずか一箇所しかないが、ここに語られるわずかな情報が、実は全編を通じてアンドレの生涯に深い刻印を残していることがわかる。

アンドレはおそらく、身体が弱くて若くに亡くなった母から、どうしても抑えることのできない憂鬱な気質や、陰気で軟弱な無気力さを受け継いでいた。
(*André*, p.35)

ここに挙げられている「身体が弱い *chétif*」, 「憂鬱 *languueur*」, 「無気力 *inertie*」といった性質は、そのままアンドレにあてはまり、そのことが父であるモラン侯爵を激怒させる。先に挙げた引用箇所での侯爵の叱責は、このような息子への苛立ちと理解することも可能だろう。

では、このような父親に対し、アンドレはどのように対応するのか。彼は父を極度に恐れているが、作品の冒頭に紹介される侯爵の生活信条について、「アンドレ・ド・モラン、伯爵家の一人息子、はそんなふうには考えなかった」(p.34)と断言されることから、彼が父の在り方を全く認めておらず理解しようともしていないことが明白である。アンドレの反応は、周囲を制圧しようとする父への屈折した形の抵抗と読むこともできるだろう。しかし、彼はその抵抗を最後まで貫くこともできない。町の女工ジュヌヴィエーヴに恋をし妊娠させたために、父の反対には目もくれず彼女と結婚したアンドレ

ではあるが、食いぶちを失うと親元に戻ってしまう。その理由は、彼には「役に立つようなことは何もできない」(p.119)からである。彼のこのような態度を理解するには、Marie-Cécile Rat-Cadarsの議論が参考になるだろう。

もし最初の愛情の対象である母親がもうおらず、父親が極端に怖かったり、あるいは極端に不在がちであったりする場合、子どもはナルシスム(極度の自己愛)を自分の中に育てることになる。このナルシスムは空想によって生まれ、常に現実から逃避することによって成立するので、外界との正常な関係は犠牲にされてしまう。そのために、真正の自己愛的神経症を発症したり、さらには重篤な精神障害に限りなく近づくこともある。⁷⁾

極端に強権的な父親は、息子を支配しようとする。息子の側では敢然と反旗を翻すつもりも気力もないが、かと言って父親の期待に沿う気も全くない。父を恐れているように見えながら、卑屈になることもしない彼の不可解な態度は、「ナルシスム」を考慮に入れば多少はわかりやすくなるだろう。「自分の世界に閉じこもることだけを求める」(p.34) アンドレは、狩りに出かけたとしてもそれはひとりになるための口実でしかなく、彼はそこでただひたすら自分の幻想をもてあそぶ(p.38)。現実からの逃避が彼の世界を確立し、周囲との関係をうまく結べないとしても、彼個人にとってそれは、必ずしもダメージとはならないのである。

その結果として彼は、死産した妻を助けることができず、そのまま死なせてしまう。ジュヌヴィエーヴは臨終の床で、アンドレに言う。

「あなたはユリのように白く、心はといえば萼のように香り豊かで、清らかだわ。茎のように弱くて、少しでも風が吹けばたわんだり倒れたり

してしまう。多分、それだから私はあなたを愛したのね。なぜって、あなたは私の大切な花と同じように無害で、無意味で、それだから貴重なんですもの。」(p.176)

ジュヌヴィエーヴが正しく看破する「弱く *faible*」, 「無害で *inoffensif*」, 「無意味 *inutile*」という性質の羅列は、冒頭で示された母親からの遺伝を、アンドレが全く乗り越えていないことを示している。母の形質を自らに取り込み、父からの影響を一方で過度に被りながら、一方で黙殺する息子は、ずるずるとした自己愛的空間に潜む。おそらく、その空間から抜け出すための唯一の光明であったジュヌヴィエーヴを失ったアンドレの物語は、彼にとって究極の現実逃避であろう精神障害で幕を閉じるのである。

母に取り込まれる息子

アンドレが、すでに失った母親の形質を取り込むことで父親から過酷な扱いを受け、結果として、ナルシシズムの果てまで落ちていく人物であるとする、『ジャンヌ』に登場するギヨームは、父親を失うことにより、母親の価値観に取り込まれていく青年だと言える。アンドレとギヨームの類似についてはすでに前稿にて論じたが、ここで繰り返し指摘しておきたいのは、彼らの男性性がストレートな形で開花することがなく、その屈折の原因が、多くは両親との関係に端を発しているように描かれている点である。アンドレの場合、亡き母と強権的な父、という組み合わせが命取りになったのなら、ギヨームの場合には、亡き父と自己の欲望を転化する母、の影響を強く被っているとと言える。

物語の始まりでギヨームは、「勇敢な若者で、物腰はやや控えめであったが心根は真摯だったし、敬虔な母親に監視されて育った良家の子弟らしく聞き分けが良かった。それに、20年前には20歳の若者ならみなそうであった

ように、夢見がちな性質であった⁸⁾と紹介されるが、ここにすでに、将来、彼の中に生じることになる葛藤の萌芽を見て取ることができるだろう。「勇敢な若者」である彼は、ジャンヌ・ダルクと共に戦いフランスを解放したブサック將軍の、直接の末裔でなかったにもかかわらず、その騎士道的精神が自らの血管に脈々と流れていると信じる青年である (p.42)。それと同時に、「敬虔な母親」に干渉を受けながら育った彼は、心優しく誠実で、なにより「聞き分けが良い」と評されている。また一方で、1820 年頃に 20 歳⁹⁾であった青年の多くの例にもれず、「夢見がち *romanesque*」でもあるというのだ。

ナポレオンの忠実な部下であった父親を失ったギヨームは、「若きブサック男爵 *le jeune baron de Boussac*」(p.41)として次の時代を切り開くことを求められている。だがそれは、父親と同じ方法を以って、というわけではない。時代は復古王政期に設定されており、ギヨームは状況にあわせて家を支えねばならないのである。そうであれば、彼に求められているのは、彼が信じて疑わないような時代があった騎士道的精神などではない。平たく言えば、ブルジョワたちともうまく折り合い、何らかの名誉ある職を得ることによって領地を運営していくことである。そのためには、経済的にも社会的にも、可能な限り有利な結婚を模索する必要もあるだろう。しかしギヨームには、これらの期待に応える力が与えられていない。パリでの勉強を終えてブサック村に戻った彼は、名づけ子である羊飼いの娘ジャンヌの美しさに打たれて恋に落ちるが、彼女の人生を背負うまでの覚悟はない。彼は「陰気になり、物思いにふけるように」なり、内心に嵐を抱え込むようになるが (p.164)、それは彼女への情愛と欲望を、「献身や勇氣」という崇高な概念へと昇華させることができないからである (p.207)。また一方で、彼はジャンヌを、単なる性的欲望の対象と割り切ることもできない。この、理想を追いながら果たせず、だからと言って、理想とは敵対する現実と折り合うこともできない矛盾をはらんだあり方が、彼に与えられた役割だと言えるだろう。

ここで、ギヨームの、妹マリーと母に対する態度の違いを確認し、彼のこうした性質の端緒がどこにあるかを考察してみよう。

この若者は、妹と同じく思いやりに満ちた本能の持ち主だったが、母の弱点も持ち合わせていた。マリーといると、彼は感情生活へと心を燃え立たせた。兄と妹は共に、この上なく徳高く、この上なく扇情的な小説をむさぼり読んだのである。だが、ブサック夫人といると、ギヨームは彼が生きる社会の権力というもの、その社会に全く同意している母が良家の子息の義務と呼ぶところのものを、思い出すのであった。(p.164)

妹のマリーは、ジャンヌが持つ純粋な精神と公平な人類愛とをいち早く直観し、彼女の美しさに心酔している。ギヨームがマリーと共有するのは、このような「思いやりに満ちた本能」であり、小説の中に何か高尚なものを見出す能力である。先ほどの引用に、ギヨームの性質のひとつとして「夢見がち *romanesque*」なことが挙げられていたが、この「*romanesque*」とはもともと「*roman*」(小説)的なものという意味であり「空想的な・荒唐無稽な」といったニュアンスを含む。しかし、この作品においてマリーが主導し、ギヨームもある程度までは追随する「*romanesque*」なあり方は、絵空事という意味合いを含んではいない。むしろ、ありえないと思われるような人間の善性への信頼が、ジャンヌという姿を持って実現されていると考えられるのである。しかしギヨームには、マリーが示すような純粋さと公平さ、また、そのようなものを世に実現させるための想像力と意志が、中途半端な形でしか備わっていない。彼の残りの部分は、母と共有する「弱さ *faiblesse*」によって侵食されているのである。

この「弱さ」の正体を突き止めるには、作品に登場するもうひとりの母親シャルモワ夫人を参照すると良いだろう。夫人はギヨームの母ブサック夫人

と同様に、帝政時代の「お祭り騒ぎと贅沢三昧の中で青春時代を送って」(p. 133) おり、その点では同じ栄光と挫折とを味わっていると言える。しかし、シャルモワ夫人が皇帝の失脚後、夫が出世できるよう、また、娘に良縁を得るためあれこれと策略をめぐらすのに対し、ブサック夫人の態度は帝政期へのノスタルジーと、表面的な寛大さに留まっている。彼女はジャンヌの美しさと働きを褒めるが、息子の嫁にしようなどとはかけらも思っていない。だが一方で、息子の病の原因がジャンヌへの欲情であると聞かされても、彼女を追放することができない。それを実践するのはシャルモワ夫人の方であり、娘エルヴィールを是が非でもギヨームに嫁がせたい彼女は、卑劣な嘘をついてまで、彼の気持ちをジャンヌから引き離そうとする。そのような行為をブサック夫人は「ばかっている」、「卑劣だ」と非難しながらも、最後にはシャルモワ夫人の策略に「感謝する」(p.272) のである。

ブサック夫人は、善良で立派な人であったが、根本的に性格の弱さ(faiblesse)という欠点があった。[...] ギヨームは母親を、実際の価値以上に評価していた。彼は彼女の分別のある語り口や、気品あふれる物腰をそのまま真に受けていたのである。(p.137)

ギヨームが受け継ぐ「弱さ」とは、この母の持つ優柔不断さであり、欺瞞だと言えるだろう。ただ、責められるべきは母親の失態ではなく、彼女のあり方を無反省に受け入れ、ジャンヌがどれほどひどい非難を受けても「私は母を責めることはできません！」(p.254) と、彼女を内面化してしまっているギヨームのほうであろう。息子が「男」になるためには、ある時点で「母親=原始の女」を切り離す必要がある。しかしギヨームは「母に取り込まれる」という欺瞞を自らに許すことによって、その作業を先延ばしにする。この作品において、母の欺瞞を軽々と乗り越え、別の地平へと堂々と踏み出す

のが、むしろ娘のマリーである点が、人物造型を考える上で興味深いと言える。

3. 母の位置のずらし：癒着からの脱却？

ここまでの考察から、母の形質に一体化したり、その価値観に積極的に取り込まれてしまう息子たちには、男としてのあり方を自ら設定する手段が与えられていないことがわかる。だが一方で、弱体化した過去の男性性モデル＝父親に助けを求めることも不可能な現状において、彼らはどのように母親から身を引き離し、自立した新しいタイプの男性性を実現できるのだろうか。バダンテールも指摘するとおり、19世紀半ばから劇的に進行する職住分離の生活形態への移行は、家族内における父親権力の相対的な低下と母子間の癒着を促し、その深い一体感は不可避のものとなって行く。であるならば、ここで問題の立て方を微妙に変化させる必要があるだろう。「同性の親＝父」を真似て（あるいは戦うことで）、「異性の親＝母」から離脱するモデルを求めるのではなく、「異性の親＝母」からの介入と親和性を前提とし、保持したままの「男らしさ」のモデルは可能か、という問いかけへのシフトである。この問いに答えるための試みとして、サンドが1836年に発表した『シモン』に描かれる母＝息子関係を、スタンダールの『アルマンズ』と比較して読み解いてみたい。

『シモン』と『アルマンズ』／シモンとオクターヴ

『シモン』と『アルマンズ』には、主人公の青年と母親との関係という観点から、多くの類似点を指摘することができる。¹⁰⁾ だがもちろん、作品の構成そのものには大きな相違点もあるため、分析にあたり、その枠組みと相違・類似それぞれについて重要な点を整理しておきたい。

初めに、舞台背景となる場所と時代の問題がある。スタンダールが『アル

マンス』を書きあげたのは 1826 年秋頃と推定され、¹¹⁾ 『シモン』の執筆時期とは 10 年ほどの差があるが、この二作品は共に、1825 年のフランスを舞台としている。この年、『シモン』の主要登場人物のひとりであるフジュール伯爵と、『アルマンス』の男性主人公オクターヴの両親マリヴェール侯爵夫妻が、フランス革命時に被った失地の回復を果たしたことが、後に若い世代の主人公たちの運命に与えた影響を考慮に入れるなら、この時代設定は両作品にとって決定的な役割を果たしているとも言えるだろう。

しかし、同時に、両者の間には違いもある。それは、シモンがフランス中部マルシュ地方の寒村出身で、労働者階級に属しているのに対し、オクターヴは、現在は貧困に苦しめられているにしても、失地を回復すればマリヴェール侯爵を継ぐ存在と位置づけられている点である。同じ、革命以前の貴族たちの失地回復（財産補償 *indemnité*）というテーマが背景をなしているが、そのことによって彼らが受ける影響には大きな差がある。オクターヴにとってのそれは、彼自身の職業選択や結婚に直結するものであるが、シモンの場合、このことによって亡命地イタリアからの帰郷を果たすフジュール伯爵が伴う娘フィアマとの出会いという、ある意味で間接的（ではあるが決定的）な条件として機能しているのである。

また、彼らに与えられた社会階層に関する設定の違いにも注目しておく必要があるだろう。小説『シモン』／『アルマンス』では共に、シモン／オクターヴという男性主人公の出自と生い立ち、人となりについての説明が、その冒頭に配置されている。シモンは労働者であった父を早くに亡くしたが、聖職者であった母の兄からの影響や、彼の知性と人柄を愛する同郷のパルケ弁護士を引きなどもあって、パリで法学を修める。1825 年に故郷のフジュール村に戻った彼は、パルケの下で弁護士としてデビューすることになっているが、将来に対して強い焦燥を抱く不安定な青年として紹介される。他方のオクターヴは、革命の後、不遇をかこつマリヴェール家の長男であるが、彼

自身は失地の回復に大きな期待を寄せているわけではない。冒頭で「ようやく二十歳というオクターヴは、エコール・ポリテクニク（理工科学校）を出たばかりだった」¹²⁾と紹介される彼は、知性に富み、大変見栄えの良い身体を持ちながら、幼い頃から病弱で「何も求めず、彼にあっては何事も、悲しみや喜びの原因にならないようであった」(A.,p.51)とされる。シモンとオクターヴはほぼ同時期にパリで勉学を修めていたことになるが、その出自の違いは彼らの運命を交差させることはないだろう。ただ、その焦燥感やあてどなさ、当時のフランスにあって多くの青年たちが共有していたものであり、シモンとオクターヴもまた、同種の逡巡を生きているとも言えるのである。

最後に、彼らの物語の結末が正反対と言ってよいほどに異なっていることを指摘しておかねばならない。シモンはフィアマからの励ましもあり、弁護士としての将来を自ら切り開くことを決心し、身分の差を乗り越えての結婚を果たす。が、オクターヴは愛するアルマンスと結婚はするが、性的不能の隠匿という状況に自ら耐え切れず、自殺の結末を選ぶことになる。この重大な差異については、本稿の最後で再度ふれることにしたい。

息子と母が分かち合うもの

彼らの母親との関係については、大きな差を指摘することができない。その事実について私たちが持つべきはおそらく、さもありませんという感覚ではなく、環境においてこれほどの差がありながらも共通点を持ちうることへの違和感の方であろう。寡婦として、兄からの遺産だけを頼りに息子シモンを育てたジャンヌ・フェリヌと、高名な貴族の家に生まれ、失地を回復すれば夫よりはるかに多くを得ることのできるマリヴェール伯爵夫人とが、息子に対する態度において多数の共通点を持ち得るならば、そこにはスタンダールとサンドという作家が感得した（おそらく新しい）母親像のモデルを見出す

ことになるからである。

では、息子たちとの関係における彼女らの共通点とは何か。まずはその仲の良さであり、相互的な一体感である。この関係性の特殊さは、『幻滅』におけるリュシアンとその母や『ジャンヌ』におけるギョームとブサック夫人などに比べることで、さらに明確になるだろう。この時代の作品に描かれる青年たちの多くは、リュシアンのように、母親に対して愛情は持っているにしても、一方的な献身を受けて当然だと振舞うか、あるいは逆にギョームのように、母親の価値観の中に一方的に巻き込まれて自らを失する。いずれにしても、一方的な感情を受け取ってしまう点において同じ立ち位置にあることは間違いがなく、シモンやオクターヴの母親との関わりが、相互的であるのとは様相を異にしている。その相互的な親近感を保証しているものは、シモンにおいてもオクターヴにおいても、息子と母に共通した資質であり、受け取ったものを母親に対し、自らの血肉とすることで報いようとする息子側の努力である。そこには当然、母に対する留保のない愛情があると同時に、母のためではなく、自分のために生きなければならないのだという自覚を認めることもできる。

シモンは作品の冒頭で「彼女が年をとってから産んだ最後の子は、身体は弱いが、彼女と同じように気高い知性に恵まれていた」¹³⁾と、母親との類似点が強調される。また、その性質が長じても変わらないことは、「22歳の青年にとっては、感情こそが信条をなすものであり、その信条とは情熱に外ならない。シモンは母の胸に抱かれて、共和主義の考えを学んだ (S., p.35)」という表現からも明らかであろう。しかし彼は、その資質がどのように開花するべきかについては、まだ逡巡の時期にある。

彼は苦しんでいたが、それは自分の無能さ (impuissance) を嘆く若者たちの多くがするようなやり方ではない。偉大な魂が経験する苦悩に、た

だ黙って耐えていたのである。彼は、自分の中に巨大なものが形をなすのを感じていた。そのため、彼の脆弱な若さは、胸の中でうめき声をあげるもうひとりの自分の重さに、身を屈していたのだった。(S.,p.35)

この表現からすれば、シモンは確かに弱い。しかし、アンドレやギョームが示す弱さとは、明らかに性質が異なっている。彼らが不毛さや無能さ(impuissance)に拘泥し、そこに自らのアイデンティティを発見してしまうのとは対照的に、シモンはそこに未開発の原石を見出し、その発現を待つ存在として描かれている。

作品冒頭におけるオクターヴの姿は、シモンのそれとよく似ている。彼もまた、自身の中で何かがうごめくを感じながらも、それを行動に移すことに対してはためらいと同時に諦めを感じている。周囲から変人扱いされながらも、実社会の生活より書物に関心を持つ息子について、父マリヴェール侯爵は「青年貴族たるものが本に熱中しているのを、ある種の恐怖心を持ってながめていた。父はいつも何かがぶり返すのを恐れていて、それがオクターヴを一刻も早く結婚させたいと望む理由のひとつだった(A.,p.55)」と描写されるが、ここに息子と父親との間に横たわる決定的な溝が明らかである。過去の栄光を取り戻そうとする父親と価値観を共有できない息子の姿はまさに、革命後の社会にあってはモデルとなりえない父と新しい世界を模索する息子、という構図そのものであろう。

このようなオクターヴの様子を母も心配げにながめてはいるが、彼らの間には、父親の場合とは全く異なる種類の親近感が存在する。おかしな本を読みすぎると非難する母親に対し、「僕はあなたが薦めてくれた本を読んでいるんですよ、お母さん。同時に、みなが良からぬ本だというものも読んでいますが」(A.,p.57)と応じる。彼は自分の判断や好みを譲ることはしないが、同時に母を否定することもない。ことあるごとに母の部屋を訪れ、長々

と話し込んでいく息子は「僕は何があってもあなたとの約束は守りますよ」(A.,p.55)と、まるで親しい恋人のように母を扱うのである。

ふたりの女(母と妻)とひとりの男

人生の門出にあつて同じような逡巡を示すシモンやオクターヴに対し、母は共に心を悩ませ、息子の苦痛をなんとか軽減させてやろうとする。しかし彼女らにできるのは、父親に代わって男の仕事を準備してやることではなく、彼らを目の前の現実に対応できるよう仕向けてやることだけである。そうした状況にある彼女たちについて、最も顕著な類似点として注目したいのが、「息子の嫁(候補)」に対する態度の描かれ方である。

シモンが恋する相手はフジュール伯爵の一人娘フィアマであり、母にとっては身分違いの相手ということになる。しかし、ある事件をきっかけに二人は意気投合し、「それから何日も経たないうちに、深い愛情と完全な相互理解とが、ジャンヌとフィアマの間に存在していた(S.,p.73)」とされる。一方、オクターヴの相手となるアルマンは、身寄りがないとは言え貴族階級に属し、マリヴェール侯爵夫人にとっては親戚の娘のような存在である。「彼女こそはこの世でたったひとり、息子がメランコリーに陥るのを防いでくれる(A.,pp.135-136)」と信じる夫人はアルマンに、息子の嫁になってくれるよう頼むのである。このように立場の差はありながら、二人の母は息子たちに一歩先んじる形でそれぞれの嫁候補と心を通わせ、彼らの心に平安をもたらすことを試みるのである。

ところで、フィアマとアルマンの間には、多くの共通点が存在する。彼女らは共に「誇り *fierté*」に満ちた人格の持ち主であり、女性的というよりは、男性的と描写されることが多い。それゆえに、彼女らと同じくらい誇り高い人物であるシモンとオクターヴは、フィアマとアルマンになれば自分の本心を打ち明けられると感じている。「どちらも男のようで」「まるで二人

の兄弟』のようだという『シモン』の中の表現や (S.,p.82), 「自分にふさわしいと思われるたったひとりの人間 (A.,p.84)」というオクターヴの感慨からも、その様子をうかがい知ることができるだろう。¹⁴⁾ また、彼女らには近親者から受け継いだ財産があり、独立した生計を営むことができる点でも共通している。フィアマは母親からの遺産により「性格もそうだが、財産の点でも独立しており」成年に達している (S.,p.68)。アルマンは身寄りもなく、物語の冒頭ではたいした財産も持たないことになっているが、後に遺産を受け取ることになる。

彼女らの性質と描かれ方の類似は、母親と息子の関係の類似を通して見れば、決して偶然ではないことがわかる。アルマンと息子の結婚に必ずしも賛成ではなかったマリヴェール侯爵が、妻の兄に向かって発した次のような言葉からも、その原因を推し量ることは可能であろう。

補償金はあなたの妹のものですから、私は相変わらずただの文無しです。この補償金のおかげで、オクターヴの立身をどうするかで考えられるわけですが、あなたの妹は息子よりずっと、と私は思うんですがね、アルマンとの結婚を望んでいます。あの娘も今じゃ、金持ちです。つまり、私とすれば誠実な人間として、ただ意見を述べるだけのことで、ここではもう、権威に物言わずなんてことは出来んわけですよ。

(A.,p.245)

ここに語られていることは非常に重要であり、それは、息子に対する親の立場の変化が、如実に表現されているからである。マリヴェール侯爵は、「権威に物言わず *faire parler mon autorité*」ことなど出来ない、と述べて権威者の立場を放棄し、それをそっくり妻に投げ渡してしまっている。父親の役割が母へと移譲される時、その性質も同時に変化を被る。男性性を引き継ぐ

ものから、女性性との親和による新たな男のあり方へ。アルマンスと結婚し、彼女と母と両方の望みを叶え、さらには自らの恋愛も成就したオクターヴを待っているのは、彼を中心に女ふたりが寄り添った幸福な三角関係とでも言えるだろうか。シモンとフィアマの場合には、男親からの放棄はないにしても、彼を支える妻と母、さらには三者をしっかりと結びつける力は同様に存在している。

こうして「男の子」は、権威を放棄した父親から解放されると同時にモデルを失い、母と妻が協同して取り組む世界への参入を求められる。そこで可能な「男らしさ」が旧来型のものでなことは確実であるが、では、どのような点において「女」ではない「男」が可能なのか。それは、母親の愛情を決して裏切らず、彼女が持つファンタズムをある程度まで叶えることで存在意義を確保することであり、さらには、女性からの扶助を誇りと共に受け入れられるあり方であろう。その点は、サンドが描いたシモンとフィアマの方により顕著に現れており、独立した女性と、彼女を敬いながら共に生きる形を模索する男性、という新しいモデルを提供している。そのことは同時に、労働者階層に生まれても弁護士になれる新しい社会や、男女平等への期待という点につながっているとと言えるだろう。

Alain Corbin らによる三巻本の名著 *Histoire de la Virilité* (『男らしさの歴史』) は、その二巻目を19世紀にあて、「Le triomphe de la virilité」(「男らしさの勝利」)の副題を付している。革命以降のジェンダー規範の徹底や、男性ホモソーシャル社会の称揚という実態を見れば、19世紀は確かに「男らしさ」を際立たせた時代であったと言えるだろう。しかし、ナポレオン後の男性たちは、腕力ではなく生殖能力の方へと価値をシフトされ、Corbin が多くの例を挙げて強調するように「性的エネルギーを見せつけることが必要」¹⁵⁾ になった。つまり、男性同士が力や勇気を競うのではなく、女性に

対する性的能力の発揮の方が、より目に見える形での「男らしさ」と評されたのである。

ここに、シモンの幸福とオクターヴの自殺という、結末の違いの原因を見ることもできるだろう。オクターヴは、自らが性的不能者であることに悩み、結婚しないつもりだったのだが、母親とアルマンスからの働きかけで彼女を諦めることができなくなってしまう。新婚旅行の後、貴族としての義務を果たすという口実にギリシャへ向かった彼は、自ら落命するように薬を飲む。彼の性的問題についてはいろいろな解釈があるが、「男らしさ」の意味の変化という文脈に乗せて考えてみれば、「不能の夫」はこの後の世界では「男らしく」生きていけないわけであり、終わった時代の遺物としての貴族の末裔は速やかに退場すべしということであろう。

このような状況を、果たして「男らしさの勝利」と呼べるのだろうか。もちろん、フランスは普仏戦争を経て19世紀末には近代的な軍隊組織を編成し、力を重視する新たなタイプの「男らしさ」を作り上げることになる。しかし、その前段階において、ブルジョワ社会の家庭生活者としての男性像が模索されていたことは、「男らしさの勝利」というよりはむしろ、女性の間で（あるいは女性に対面する）男性がどのようにありうるか、という問いかけではなかったかと思われる。この時代に描かれる多くの男性たちが彼らの母に大きな影響を受ける理由のひとつを、そこに見出すことも可能だろう。

-
- 1) 『『男らしさ』はどう描かれているか—ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』を題材に—』（『外国文学研究』第28号、奈良女子大学文学部外国文学研究会、2009年、pp.39-62）や「ヒーローになれない男たちの身体—ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』から『ジャンヌ』へ—」（奈良女子大学文学部『研究教育年報』第7号、2010年、pp.49-60）などを参照

のこと。

- 2) George Sand, *André*, Editions de l'Aurore, Meylan, 1987, p.150. 以下、フランス語のテキストからの引用は拙訳による。
- 3) Pascale Hustache, *Destins de femmes - dans le roman populaire en France et en Angleterre au XIX^e siècle*, Editions Dittmar, 2009, p.140.
- 4) *Ibid.*, p.139.
- 5) エーヴは、リュシアンとダヴィッドとを強く結びつける役割を果たす。男二人の間でやりとりされる姉／妹という構図は、セジウィックが『男たちの絆』において、「ホモソーシャル」関係の象徴的な在り方として強調しているところである。
- 6) Elisabeth Badinter, *XY - De l'identité masculine*, Editions Odile Jacob, 1992, p.51.
- 7) Marie - Cécile Rat-Cadars, «Séductions artificielles et descentes aux enfers : itinéraires croisés de quelques personnages naturalistes » in *La Séduction - Donjuanismes européens et littératures émergentes* (Actes du séminaire de littérature comparée, Equipe littérature et herméneutique, Université de Toulouse II), textes réunis par André Mansau, Eurédit, 2010, p.132.
- 8) George Sand, *Jeanne*, Editions Glénat, Grenoble, 1993, p.42.
- 9) 本作品は、1840年代から過去を物語るというスタイルを持っている。物語の舞台は1820年代に設定されているので、語りの現在から見ると20年前になる。
- 10) サンドとスタンダールの作品における母親の役割とその重要性については、Maryline Lukacher, *Maternal Fictions - Stendhal, Sand, Rachilde and Bataille*, Duke University Press, 1994などを参照。
- 11) 『アルマンズ』は、スタンダールが初めて取り組んだ長編小説。オリジナル版にはタイトルとして *Armance ou quelques scènes d'UN SALON DE*

PARIS EN 1827 と掲げられているが、執筆時期は書簡の内容などから、1825年から翌年にかけてと推定されている。

- 12) Stendhal, *Armance*, GF-Flammarion, Edition présentée, établie et annotée par Jean-Jacques Labia, 1994, p.51. 以下、この作品は *A.* と略記し、ページ数のみを示す。
- 13) George Sand, *Simon*, Editions de l'Aurore, Texte établi, présenté et annoté par Michèle Hecquet, Grenoble, 1991, p.29. 以下、この作品は *S.* と略記し、ページ数のみを示す。
- 14) 女性二人が男性的とされるのと対照的に、男性二人は病身なところや気持ちの弱さ、美貌などから女性的と描写される。
- 15) *Histoire de la Virilité*, tome II, «Le triomphe de la virilité, le XIX^e siècle», sous la direction d'Alain Corbin, Jean-Jacques Courtine et Georges Vigarello, Seuil, 2011, p.125.